

鴻臚館

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



平安京を一望する（南から）

中央の千本通はかつての朱雀大路、それを挟んで両鴻臚館が並んでいた。

古代から海外との交流は、欠くことのできない国の重要な政策であった。島国である日本も決してその例外ではなく、外交を積極的にはかり、制度や文物を吸収していった。交流が盛んになるにつれて、外国から訪れる多数の使節を迎えるための施設が必要となった。このため平安京内に、使節の宿泊や饗宴を目的とする場所として鴻臚館が設置された。鴻臚館とは唐風の呼び名で、今風に言えば東京の赤坂にある「迎賓館」と同様な

施設である。鴻臚館は、海外への窓口であった大宰府・難波京・平安京に所在していたと考えられている。平安時代、鴻臚館の管理や運営は、政府（官）の機関であった玄蕃寮が司った。この時代、正式に交流があったのは渤海国で、国の使いである渤海使は延喜八年（908）まで続いた。

平安京の鴻臚館は朱雀大路を挟んで左京と右京に対称に位置し、左京の鴻臚館は東鴻臚館、右京の鴻臚館は西鴻臚館と呼ばれ、それ

ぞれ七条一坊三・四町に所在していた。

何年に一度かの渤海使のため、普段利用することのない両鴻臚館を維持管理することは、財政的に大変な負担であったのであろう。承和六年（839）には東鴻臚館は廃止され、それ以後西鴻臚館だけになった。現在その跡は、野菜や鮮魚を扱う中央卸売市場第一市場となっている。

さて東西の鴻臚館は、いつ頃から造営され始めたのであろうか。

史料が乏しいため詳細は明らかでないが、弘仁元年（810）四月には渤海使を迎えて鴻臚館で宴会を行なっている。この時すでに鴻臚館は完成していたのか、あるいは造営半ばであったのかについては定かでない。

では造営当初の状況を、中央卸売市場内で実施した発掘調査の成果からみてみよう。残念ながら鴻臚館の復元に結びつくような遺構は発見できなかったが、そこに使用されていたと考えられる軒瓦が350点以上も出土した。軒瓦は、軒丸瓦・軒平瓦ともに半数以上が平安京造営以前、すなわち平城京・難波京・長岡京などで使用されたものであった。また、平安宮以外ではめったに見ることのできない鴟尾なども出土している。

このように平安京造営以前の都で葺かれていた瓦が出土することは、どのような歴史的な背景が考えられるのであろうか。造営以前の瓦が平安京から出土するのは、長岡京の廢都にともなって利用で

きる建物や資材を解体して新京へ運び込んだためであろう。平城京や長岡京が造営された際も同様なことが行なわれている。解体された資材は、造営を急ぐ重要な場所から優先させて搬入していた。平安宮跡や神泉苑、官の寺である東寺などから平城宮や長岡宮の瓦が出土することは、そのことをよく物語っている。西鴻臚館跡から出土した瓦も、同様な状況であったことがうかがい知れる。

鴻臚館は、造営当初から計画され、平安宮の主要官街と同様の位置付けがなされていたことが察知される。

こうした鴻臚館とは、一体どのような建物であったのであろうか。それを知る一つの手がかりとして、宮内でしかみられない鴟尾が出土していることや、ベンガラの付着した軒平瓦なども認められることなどから、平安宮内に建立された瓦葺き建物と同様のものが想定できよう。

大宰府の鴻臚館跡の調査では、

整然と並んだ瓦葺きの礎石建物が検出され、当時の姿が復元されている。

ところで出土した瓦のなかには緑釉瓦が1点も認められない。平安時代の緑釉瓦は、平安宮内の中心建物や神泉苑、東寺・西寺などの限られたところだけに用いられた。外国からの使節を迎える重要な鴻臚館に一切葺かれなかった理由に、この施設が常時利用されなかったことも考えられる。

さて鴻臚館はいつ頃まで利用されていたのであろうか。正確なことは明らかでないが、平安時代中期末頃、藤原道長が法成寺の造営に際し鴻臚館の礎石を一部抜き取ったと記録にある（『小右記』）。平安時代後期には更に荒廃が進んでいたものと推定される。

（鈴木久男）

《渤海国》7世紀から10世紀にかけて、中国東北部から朝鮮半島北部にあった国。727年から908年までの間に33回の使節（渤海使）が往来している。



調査地と鴻臚館跡の位置



東鴻臚館跡の石碑